

カントとドイツ哲学の研究

内田 浩明（うちだ ひろあき）
工学部 総合人間学系教室 准教授

用途・応用分野：文献研究、人間理解

■ 研究概要

私は、ドイツ哲学、なかでも近代哲学者のイマヌエル・カント（1724-1804）の思想を中心に研究しています。カントの著作は数多くありますが、主著の『純粋理性批判』は、まず理解しなければならないものです。しかし、それだけではカントの思想の全体像は当然浮かび上がってきません。

そこで、最近ではカントが最晩年に書き残した『オプス・ポストウムム』（ラテン語で「最後の作品」という意味）と言われる草稿と『純粋理性批判』やカントの他の諸著作との関係を解明するための研究を行っています。『オプス・ポストウムム』は、草稿であるため、取り扱いが非常に難しく、現在日本で本格的に研究している人は数名しかいません。

■ 研究の特徴

① **同時代の哲学者との関係を中心とした『オプス・ポストウムム』研究**：『オプス・ポストウムム』が書かれた時期にはフヒテ、シェリング等の次世代を担う哲学者が登場してきます。そのため、彼らとカントとの相互影響に重点を置きながら、『オプス・ポストウムム』研究を進めていますが、日本においてこのスタイルで研究を行っている研究者は殆どいません。

